

英文法から英語学へー 1 *

導入編

山 崎 英 一

(平成18年 3 月31日 提出)

国際語としての英語の教育が今までにもまして重視される中、コミュニケーション力向上のために会話練習のみが重視され、英文法が軽視されていく風潮がある。又、授業としての「英文法」を単なる暗記科目と考える学生も多い。つまり、実用性と「英文法」との繋がりが希薄化しているのである。このような状況においては、英文法の学問的かつ体系的延長ともいえる英語学の意義も評価されづらくなりつつあると言える。学生の英語力の向上のみならず、英語学への関心も高めるためには、英語の運用力を高めることを目的とする「英文法」教育を目指す中で、ここに英語学的観点を取り入れることで英文法の実用性を向上させると同時に、そのことで英語学につながる思考性に発展させることが望ましい。このための文法項目的な検討を、特に、国際的にも定評のある *English Grammar in Use* を中心的たき台として行う。更に、本論考では上記目的の前提となる、英文法の必要性に関する再吟味等、準備段階の議論も行う。文法学習なしに第二言語の習熟はありえないが、そのためにも英語学的な視点での説明力や予測・判断力の向上が重要であることが垣間見られるであろう。

キーワード：英文法、英語学、学校文法、理論言語学、英語教育、*English Grammar in Use*

0. はじめに

中学から高校にかけて学習し、そして大学で復習・補講、あるいは実践力強化としての練習を図る英語に関し従来基本となっていた文法、いわゆる学校文法、が Jespersen らを代表とする伝統文法に主に立脚し、統語論に代表される理論系の現代英語学の知見を必ずしも反映していないことは、大学で英語教育に携わる学者・教員であれば経験的に周知のことであろう。多少とも誇張した特徴づけを行うならば、規則の例外も認めつつ、「あるべき文法」「正しい文法」、つまり規範文法、の提示を目指す伝統文法の書や、あるいは、そこに、現在の英語をデータベース等も踏まえそのま

ま記述する記述文法の傾向を加えた、学習者向けの文法書では、多大な例外を認めていることから、体系に基づく予測はおろか、(連関を無視し、各文法項目内で学習者がわかったような気になれればいいということなのか) テキスト内ですら必ずしも一貫した説明が行われないことがある。つまり、理論系言語学が重視する記述性、説明力の高さ、予測性の内、少なくとも後者二種は軽視される側面がある。

一方、現代の諸理論は体系を重視するがために複雑化しており、学習に適用する際に重要と思われる体系に沿った思考が必ずしも容易ではない。高度な次元ではともかく、コミュニケーション

ンを図るのに必要な基礎的英語力のレベルでは、使いやすさや直感的な次元でのわかりやすさの点で昔ながらの文法のほうが上回る場合が多いのである（例えば Chomsky 派のミニマリストプログラムのほうが従来の学校文法よりも英語学習に便利であると主張する者はいないであろう）。又、述べてきたように、両者のイデオロギーがまったく異なることや、そのために段階的变化が困難であることを考えれば、前者に基づく学校文法が理論言語学的文法に取って代わられることがなかったのもやむをえないことであろう。

上記のことを踏まえた上で、本論考の目的を一言で言えば、英文法教育に、英語学的に見出されてきた知見の内に取り込みやすい成果を加えることで文法項目の具体的指導改善を図り、よって英文法の明瞭さを、ひいては重要性を高め、このことで学生の学習性を高めると共に、英語学への多少ともスムーズな移行を図るというものである。言い換えると、主に二つの志向を有する形で英文法と英語学との橋渡しを目指す論考と言える。一方は昨今の理論言語学的知見を学校文法の説明や一貫性・体系性の理解とその利用とに役立てることを指向するものであり、もう一方は、体系的理解を深めることで、英文法を暗記科目としてではなく、英語による自己表現の際への積極的な手段として利用することを促すと共に、英文法の先にある英語学の基盤となる理論性に親しませるという指向性である。この二方向の目的を、実際の英文法書の具体的な検討を通して果たす。ただし、範囲が膨大であり、かつまた予備的な議論がまず必要であると考えられるため、本論考ではこの予備的議論と一部の文法書項目の検討にとどめ、残りの重要文法項目や、総括的な展望等については以後の論考での議論とする。

なお、二つの指向性といっても、通常「英語」関係の学科においては、高校までの基本の英文法

学習、あるいは大学での追加・復習としての英文法学習が前提とされるであろうが、英語学は必須というよりは選択肢の一つに過ぎないであろう。故に、以降の議論では、主に授業としての「英文法」の際にいかに理論言語学（筆者の専門も踏まえると更に語用論・意味論を中心とした知見）を反映するかという観点からの論述となる。結果として英語学レベルの議論は主に注に記してある。これはもっぱら読みやすさを考慮してのものであり、必ずしも注のほうの論点・主張の度合いが低いということではない。

又、上記のことからわかるように、本論考は英語学の真理探究を直接の目的とするものではなく、あくまで、理論言語学（筆者の専門からは特に語用論、意味論、統語論）における今までの成果をいかに「英文法教育」に反映させるか、というものである。故に、議論を支える理論観や前提的仮説は、理論系言語学（Chomsky 派を代表とする統語論、認知系論理系を含めた意味論、Grice 派とその流れである関連性理論を含む語用論）の一般的立場を踏まえている。

1. 理論としての英文法の意義：そもそも英文法学習は必要か

本節では、具体的に文法項目の検討に入る前の準備的議論の更に前提、あるいは礎的な点を確認しておく。つまり、文法の必要性の再確認である。英語教育に文法教育が必要ないのであればそもそも以降での項目検討の必要はない。この場合、英語学はあくまで英語教育と無関係でかまわないこととなるであろう。つまり、英語学的理論観の育成（思考力の強化等）は科目としての「英文法」とは切り離して論じるべきこととなる。すると、英語系の学科において、英語学を中心（のひとつ）に据えるのが基本的な伝統であるとするのであれ

ば、この学科に入学してくる、通常英語学にはまだ触れていないこともあって、英語習得そのものに専らの興味・関心がある学生のニーズにまったく応えていないことになりかねないであろう。

又、昨今の学会外の、社会的な動きとしては、英語の学習に重要なのは文法ではなくコミュニケーションの促進であり、そのためには体系的な文法学習よりも慣用句等にあふれた会話の機会を増やすべきであるとの考え方がかなり一般化しているように思われる。確かに、特に暗記的な知識として指導された英文法のみで、それを適用する機会や慣れのための機会がないのであれば、よく使われるたとえであると思われるが、水泳教本を読むだけで泳げるようになろうとするようなものであり、このような英文法教育だけで実用的な英語習得を期待することには無理があろう。当然、英語関連学科が実務的な教育抜きに、英語学を指導すればそれでよい、とも言えない。

しかし、やはり一般に20歳前後の大学生が母語としての言語習得期を終えているのが事実であるという一般的な想定に立つならば、当然、慣れだけで、あるいは体系のない表現の組み合わせでしかないダイアログ中心の学習で言語パラメータが適切に定められるとも、通常は「英語漬け」とは呼びにくい日本の英語教育環境で十分な文法を発見的に習得していくとも考えにくい。つまり母語である日本語と異なり（日本語用しか身につけていない）言語的な「山勘」では英語の運用力は伸びないのである。¹

ここで、英文法は一切必要なく、日本語と同じ感覚でも単語さえ英単語なら充分通じる、としてみよう。極論ではあるが、例えば「単語が何とかなればあとは気持ちで何とかなる」という伝の考え方だとみれば、意外に一般受けしている考えであると思われる。確かにパターンの会話のみでなんとかなるレストランでの注文時等はある程度

何とかなるかもしれない。が、ここで、極端ではあるが議論しやすい例として、ホームステイ先の夫婦喧嘩を見てしまい、それを友人のホストファミリーに話そうとする状況を検討してみよう。この際、英文法を抜きにし、日本語そのままでのコミュニケーションを図るのであるから、例えば(1)のようになる。

(1) Mary John hit

日本語では語順が比較的自由である（つまり「メアリーをジョンが叩いた」のつもりとすることも可能ではある）が、一応「メアリーがジョンを叩いた」のつもりで発話したとする。中高を中心とした学校文法的にはこれは英語の語順ではない。故に、うまく意味が伝わらずコミュニケーションが成立しないだけで深刻な実害はないと考えるかもしれない。実害がないのであるから不経済ではあるが、「単語だけで充分」の反例にはならない、と。しかし、実際の場合では、(学校文法では通常対象外と思われるが英語学では有名な)いわゆる話題化（topicalization）の例であるとして解釈される可能性がある。つまり、(2)として解釈されるということである。

(2) Mary, John hit.

(3) John hit Mary.

(2)は談話的機能はともかく物理的意味としては(3)と同一であるため、理解されず実害がない、では済まずに、全くの誤解の形で情報伝達が行われる。厳密にはコミュニケーションの失敗ではあるが、間違った情報が伝わるという意味で表面上成立していることになる。ここで、(州による違いは不明だが)米では夫婦喧嘩の場合でも警察が加害者を逮捕するので、この場合、被害者が更に

逮捕までされてしまうというかなり深刻な展開も、可能性上ないとはいえないのである。

もちろん、文法抜きで会話に慣れ親しむことでもある程度の語順は自然に身につくとは考えられ、(1)の例のような事態は極端かつ誇張した場合であると言えるであろうし、習熟するために実際のコミュニケーションの機会や代替としての練習作業の機会が必要であることも否定しない。しかしながら、やはり(1)の例は英文法教育が全く必要ではないという議論は間違いであることを端的に示唆していると思われる。

では、文法教育が必要であるとして、どの程度の文法力が英語教育に必要なのか、ということになるが、日本での一般的英語学習環境を念頭に考えてみよう。² この場合、「あくまで熟語や単語等の語彙に属する知識を除いた文法知識」に限って考えるならば、経験上、英検2級取得に必要な程度の知識は最低限必須であろう。例えば、冠詞の基本的用法の知識といった中学からの学習知識はもちろん、ifを使った反実仮想文（いわゆる仮定法）、あるいは間接発話のような、英語学習者にとっては苦手な傾向のありながらも基本英文法に属する項目である。これらの知識の実践力への昇華には、無論慣れや経験等実践的練習が必要であり、結果的に習熟者は英検2級をはるかにしのぐ実力を有することになるとは思われるが、ともかく文法知識としては2級程度がひとつの目安となろう。スキーにたとえるならば、この程度がいわゆる「八の字」の滑り方に相当し、パラレル等の中級レベルとはいいいくいが、それまでのちょっとした高さまで歩いて上ってすべるのではなく、リフト等で頂上に上り（多少苦労しつつも）滑り降りてくることができる程度に相当するであろう。つまり、一通り見通しが立つレベルである。あるいは普通車運転免許をとった初心者や空手の初段保持者（有段を示す黒帯の中で最下位であり修行

の完結は意味しない）にたとえてもよいかもしれない。

なお、もちろん、ここでの議論は「英検2級程度までの学習項目で充分」でも「2級程度が教育到達目標である」ということでもない。例えば、これらの項目は、英国で外国人が就職する際に求められることが多いCambridge英検の最上位(Proficiency)をパスするのに必要な知識でもあるが、この試験は英検2級に比べはるかに高い運用性が必要であり、トータルな英語力では、おそらく英検の1級を凌ぐであろう。しかしながら、あくまで文法知識に限って言えば、2級前後で一通り見通しを立てられるということである。これを使いこなせるようにすることで、基本的なコミュニケーション力が期待できるのみならず、海外でも就職が可能になってくる、そのようなことを視野に入れての、「到達点」ではなく「出発点」レベルであるという意味であり、授業としての「英文法」としてはこの2級程度の知識の、英語学的知見を踏まえた理解と、その先の習熟を一つの目安に行うべきであろうということである。

なお、注意したいポイントとしては、上記の文法知識が、慣れのみで体系的学習抜きに身につくとは考えにくいということがある。例えば冠詞、仮定法、話法は、いずれも日本語には明確な区分としては存在しないか適用規則が異なるものであり、日本語では本来山勘すらありえないのである。^{3 4 5}

本論考の目的を考えれば、英語学的知見を適用することで、このような基本の英文法をどれだけ単なる知識から実践力に高めやすくできるかという視点も忘れないようにしたい。

2. 英文法に英語学的知見、学問的思考性を：知識から実用へ

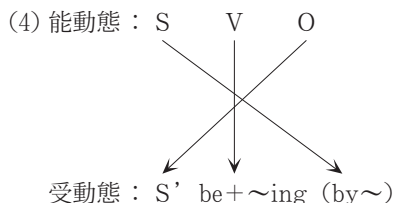
英文法が暗記対象でしかないのか、実際にそれなりの実用性を有しているのか、は個々の学生の文法観にもよると思われるが、実用性を求めるという社会の要請は当然のことと考えられる。その観点から言えば、単に知識として教授するのではなく、知っていて、かつ使えるようにならなければならないというレベルにまで学生の学習意識を高める必要がある。このことを具体例で考えよう。

学生に英文法の必要性を認識させるだけなら前節でのメアリーの例でも充分であろうが、英文法を使えると能率的であるという意味で有益であることを日本語の自動詞受身を例に考える。なお、以下の例では、本質的な点には問題はないと考えられるが、学生への指示の便宜上、「…しまった」のような表現を避けるため多少違和感がある。

- (1) その生徒はトイレでタバコを吸っている時に先生に来られた。
- (2) 彼は昨日、帰り道雨に降られた。
- (3) あの人は戦争で息子に死なれた。

これら (1) ～ (3) の日本語を、それぞれ、come、rain、die といった基本表現を用いて英語の受動態に直訳できるかどうか、という課題を学生に提示するのである。これにより、学生の文法力を断片的にだが推察できる。

日本で従来の英文法教育を受けた者にはおなじみの (4) の図式が染み付いている者であれば、つまり、受動態となれば真っ先に (4) を想起する学生であれば、この課題は非常に容易なものである。



つまり、(4) が身につけているものであれば、英語の受動態は目的語 (O) をとる動詞、つまり他動詞に対して適用されることがわかるであろう。加えて、通常 come/rain/die は自動詞であることを想起するという、ごく基本的な知識を実際に運用するだけで、この場合英語で表現するには受動態を用いることができないということがすみやかに (まさしく一瞬で) 判断できると考えられる。更に、能動態の基本的な知識も受動態の学習の前提となることから、この場合は能動態で同様の物理的意味を表現する戦略にとどまるべきであるという判断にすみやかに移行できると期待できる (コミュニケーション的な発想になれている学生であれば更に “unfortunately” 等を加えることで日本語に近似的な英語を考えるであろう)。

一方、受動態で直訳できるかどうかの判断にてこずる、あるいは判断できない学生は、例えばグループで30分ほど議論させても答えを出せない傾向にある。原因としてはいくつか他の可能性も考えうるが、基本的には、運用性も含めた (4) の習熟度が低い (知らないか、使いこなせるレベルにない) と考えられるであろう。⁶⁷

さて、この例は、日本語が英語と違い自動詞受身が可能であることを示す例でもあり、日英語比較といった英語学 (あるいは日本語学) 的な方向への発展もはかれるが、英語教育という側面からはむしろ、次のことを学生に強調したい。すなわち、英文法をきちんと使いこなすことで、莫大な労力や時間を節約し、かつ成果をあげる (この場合、訳作業に色々と悩むことなしに、受動態での

直訳はできないとの判断を得る）ことができる。慣れだけでは、これらの例でも平気で“was rained”などと表現しかねない上に、「直訳できない」ということを断言することもできない。⁸

ここまでのことから明らかなことは、日本語を逐語訳、あるいは直訳すれば英語になるわけではなく、英文法は暗記にとどまるものでも知っているればよいというものでもないことだけではない。そうではなく、例えば、英文法は、非英語母語者が、自分のいわんとするメッセージを形にするための道具である。作図に例えるならばコンパスや定規のようなものであり、持っているだけではなく使う必要がある手段であるということである。そしてその使い方をうまく工夫することで色々な図（メッセージ）を表現できるのである。⁹ 英文法を知識として有するのではなく、積極的に利用することが英語力向上の一助となり、更に英語学的な理論的思考へとつながることが指導しうるのである。

3. 追加検討

3.0 *English Grammar in Use*

前節までの流れを踏まえ、今後の論考（つまりパート2以降）においては、具体的に実際の英文法書を取り上げ、その中で扱われている項目と記述・説明等に関して具体的に検討を加えていく予定である。この検討対象として *English Grammar in Use* (Cambridge University Press 刊) の第3版 (2004) (以下 EGiU) を中心的たたき台として取り上げる。今後の論考ではこれを英語学的（特に語用論的）に補正することになるが、本節ではその一端を先行的に例示する。

EGiU を取り上げる積極的な理由は、現代の実際の英語の学習を目指す者を対象とした書である

こと、文法項目を広範かつ総括的に扱っているため、応用を目指す学生にも基本の復習を必要とする学生にも適することから日本のような大教室で多数の学生を一度に指導するのに適した英語参考書であること、そして又、海外の語学学校でもよく目にするまさに標準的文法書と言えると考えられること、等による。又、より学問的視点からは、理論系の現代英語学というよりは、伝統文法的、あるいは規範文法的である一方で、最近の実際のコミュニケーションにおける英語の有りようを考慮した記述、つまり記述文法的側面も有しているという点で、日本での昨今の高校までの英語学習と比較的整合性を保ちやすいことがあげられる。この、規範的側面に加え記述的側面が混在しているということにより、体系内的整合性に関する興味深い問題が多々ある。又、最近の理論的言語学の側面が希薄なため、特に語用論的視点と意味論的視点が区別されていない説明であるため、汎状況的な説明に劣るが、逆にこのことが（教員による専門的な指導が必要であるが）英語学への導入に向いていると考えられるのである。

念のために述べておくが、本論考の目的は書評ではない。しかしこのように特定の図書に限定するのは、少なくとも表面上書評であるにとられかねない。この点に関しては次のように主張することで問題を回避したい。すなわち、この論考が「英文法」を中心とし、そこから「英語学」を視野に入れた発展を考えるというものであることから、実際の授業で使用する状況にあわせてたたき台の選定の結果であると。まず、実際の授業において、複数の英文法書を、参考図書として紹介することはありえても、複数全部を同時に中心的テキストとして使用することは考えにくい。次に、日本での英語教育という環境から考えれば、日本で出版されている、日本語母語者執筆による英文法教本をたたき台とすべきであるとの意見もある

かもしれないが、そもそもこの場合、本文が日本語であるだけでなく、日本語訳がついている場合が通例である。そこで、例えば英語の進行形 “be+ing” はイコール「～ている」である、と学習者に印象付けてしまう。以下の議論でも明らかに、両者は同一の情報をあらわしているとは限らないことから、(全くの初級者はともかく) 学生を相手に日本語からだけのアプローチは学習上の妨げとなろう。必要に応じて教員が日本語の対応例を紹介することはありえても、最初から訳してある必要はないであろう。故に本書のようにすべて英語で書かれている本に分があると考えられる。又、最近の理論言語学の成果を視野に入れた英文法教育、という観点から書かれた他書もある。例えば Huddleston & Pullum による *A Student's Introduction to English Grammar* である。確かに良本であるとは考えられるのであるが、最初からこの視点で書かれた本は、通常基本的な英文法力と基礎的な英語学的知識を必要とする。つまり、学習者向きというよりは、一通りの学習が終わった者に適切であるという、少なくとも本論考の学習者の想定に関しては多少とも本末転倒的な書となっている。更に、類書ではなく、本書 EgiU を扱うのは、実際に、本学(四天王寺国際仏教大学)において英語専門の学生対象の「英文法」において採用しており本論考の考察を直ちに実際の指導に反映させる、あるいは逆に実際の成果からの論考に生かせると思われることにもよる。なお、本書をたたき台とする考察は、程度の差こそあれ、他の類書でも応用できると考えられる。もちろん、目的から逸脱しすぎない程度において、パート2以降での議論・考察の発展に応じて他書への言及も行う場合があると思われる。以上のことから、書評が目的ではなく、あくまでたたき台としての考察が目的であることが理解していただけるものと考ええる。¹⁰⁾

3.1 現在進行形：「ている」からの脱却

英語の現在進行形に対する定訳が「ている」であるのは周知のことである。これが(1)のような例では問題ないと思われる((1'))。

(1) Mary is talking to John.

(1') メアリーはジョンと話をしている。

しかし、(2)の場合(2')ではなくむしろ(2'')に表される状況を示す。

(2) The door is opening.

(2') ドアが開いている。

(2'') ドアが開きつつある。

(2') に対応するのはもちろん(3)である。

(3) The door is open.

すなわち、英語の現在進行形は日本語の「ている」と一致するものではない。指導に際し、「しつつある」という日本語に対応する場合もある、とするのも最初の便法としてはありえようが、上記受動態で示したような、日本語から英語に、あるいはその逆に直訳すればよい、という態度からの脱却を図るためには、現在進行形は発話時に進行中の動作を示すのが中核である、という点を徹底する必要がある。そうすれば、進行中の動作を示す際に日本語では「ている」がよく使われるが、時に日本語の「ている」は結果の意味((2')は開いた結果の状態にあることを示す)になることもあり、そのような場合進行形を使った英文が表す事態は、「しつつある」で表現されるに近いということも理解しやすくなる。

以上の点を踏まえて EGiU を見てみると、例 (4) の説明として “This means: she is driving now, at the time of speaking. The action is not finished.” としている (p.2)。すなわち、上記のように、現在進行形は、発話の時点で実際に進行中の動作を示すと考えるのである (故に時に日本語の「している」に対応する)。

- (4) Sarah is in her car. She is on her way to work. She is driving to work.
(ibid. p.2)

問題は、同ページの数行下で、“The action is not necessarily happening at the time of speaking.” としている点である。

- (5) Steve is talking to a friend on the phone. He says: I’m reading a really good book at the moment....
(ibid)

数行上で「発話時進行中」と説明しておきながらすぐ下で「進行中とは限らない」とされたのでは明らかに説明不足である。日本語の「ている」の文でも同様の用法があるため、日本語を直訳して英語を作るレベルの者にはむしろ気がつきにくい点であるが、このことをもって日本語利用に戻るべき、としては学生の英語運用力の向上は期待できない。

この点に関しては、例えば認知意味論系での「意味の拡張」といった考え方や、認知語用論の基準である関連性理論の “ad hoc concept construction” の考えを利用するとよいと思われる。すなわち、人間の情報処理では、文字通り、あるいは物理的な解釈に留まらず、いわゆる比喩的な拡張や、状況に応じた意味の調整があるとい

う考え方である。現在進行形に適用するならば、物理的には進行中とはいいた場合でも、心理的に進行中であったり、あるいは、動作自体から event (出来事) へと記述対象をシフトし、その event 自体が進行中である、ということが可能になっていることになる。¹¹

もちろん、この説明の下では、どのような時にこのような拡張が行われるのかを把握するために (理論による予測がない場合) 経験による習熟が求められるが、本論考は経験や練習による習熟過程を否定するものではなく、むしろ積極的に肯定する立場である (EGiU の右半分が練習問題であることを想起されたい)。

このような「意味の拡張」は、例えば前置詞群の意味分析でのような、認知的な意味のネットワークからの検討が有益であると考えられるが、これは以降の論点としたい。

3.2 現在時制

次に関連領域であり、かつ難度自体は上がる、現在時制を少しみよう。

現在時制と進行相とから構成される現在進行形の中核が「現在進行中の行為を示す」であるのであれば、現在形は「現在の行為を示す」つまり「発話時の動作」と捉えるのが正当であると予想される。しかしながら、現実における英語の現在形 (特に動作動詞の現在形) は、「現在」の感覚とかなり異なる。一つにはこの捉え方では現在進行形との違いが不明瞭である。EGiU の記述を見よう。

- (1) [Alex が寝ている挿絵に関して] Alex is a bus driver, but now he is in bed asleep. He is not driving a bus. (He is asleep.) ...He drives a bus. (He is a bus driver.)

更に続く説明において “We use the present simple to talk about things in general. We use it to say that something happens all the time or repeatedly, or that something is true in general.” としている。

これは、日本語の現在時制の感覚とかなり異なることを示すとともに、広い意味での「習慣」という観点から（動作動詞の）現在時制を捉える必要があることを示している。

(2) にわかるように、英語の場合恒常的真理も現在形の守備範囲である。

(2) The earth goes round the sun.

(ibid)

一方日本語は真理や習慣にも「ている」を用いることがあり、英語の現在時制の習熟を妨げていると考えられる。

(3) 地球は太陽の周りを {?回る／回っている}。

(4) 僕は毎朝4キロ {走ります／走っています}。

これは、上記の、「意味の拡張」自体を、意味そのもののみならず、「習慣」という説明の語句にまで適用すべきことを示唆していると考えられるが、同時に、現在時制の習得にも知識だけではなく練習が必要であることを示している。

4 中間的結詞

以上、英語学的知見を英文法教育に生かすことの発端をみた。本論考は実質的に予備的議論中心であったが、英文法の重要性を再確認することで、その先にある英語学の重要性、ひいては今後の本プロジェクトの続行の重要性が示せたと思う。本プロジェクトの最終的な評価は今後の論考にゆだ

ねることになるが、開始の正当性は少なくとも示せたと考える。今後は本論考で予備的議論であった議論の深い検討も加えつつ、今回扱っていない文法項目についての考察を展開していくこととなる。

注：

*：本論考をまとめるにあたり、審査員の方々から様々なご指摘ならびに有益なコメントをいただいた。ここに謝意を示したい。個別に言及するのではなく以下の方針で筆者なりに答えたり、あるいは検討課題とさせていただいたつもりである。まず、誤字等小さな項目に関しては適宜修正を加えた。また、追加考察すべき観点等、大きな検討項目に関しては、様々な追記や修正等で全般的に論考を引き締める形で対応した。なお、筆者の専門分野外の領域からの検討を必要とし対処に時間がかかる検討項目等、今回の論考では対処しきれない事項もあった。今後研鑽を積み、パート2以降執筆時に盛り込むことを検討する方向で対処したい。もちろん、依然残る問題点の全責任は筆者にある。

1：かつて Chomsky 派の G B 系統語論の時代には「日本語は英語の鏡像である」との主張をする学者もいた。つまり、日本語は英語と文法的に反対の様相を示すということである。もちろん、表面的な意味で正反対になっているのではなく（もしそうなら例えば日本語の主語は文末に来てしまう）、英語が head-initial なのに対し、日本語が head-final であるというよう（例えば VP 内で英語は [V-O]、日本語は [O-V] となる）に、理論内パラメーターにおいての意味である。故に、「日本語での山勘とは逆の語順にすれば英語になるので、やはり（英文法や理論抜きで）山勘に頼ればよい」ということでは決してない。

2：ここでは従来学会においては基本的であろう想定にたっている。すなわち、母語の習得、あるいは母語並みの習熟度の言語習得には臨界期があり、それを過ぎた場合言語は「習得する (acquire)」のではなく、「学習 (learn) する」ことになるというものである。更に、日本語母語者にとっての日本語が、ヨーロッパ言語母語者の場合と異なり、英語とは理論上かなり異なる言語であることから、この場合の「学習」は体系的な知識の理解も含むものと考えている。

一方、このような第2言語習得に関する前提に対し、臨界期の年限やそもそも臨界期が存在するかどうかを再検討することや、文法教育等の体系的知識抜きでの経験のみによる学習の可能性を検証することも重要であろう。又、これらのことも含めたトータルな形での英語教育のありように関しては、「英語」関連の学科のカリキュラムがどうあるべきかの議論とも繋がる。これらは学問的、あるいは教育的に重要であるものの、「文法」の授業とそこの理論言語学の応用を考察対象とする本論考の範囲を大きく超えるものである。

3：冠詞は日本語では義務的ではなく、裸名詞（例えば「先生」）のみで {a/the} どちらの場面でも用いる。例えば高校生がトイレでタバコを吸っているような場面では、この生徒にとってはとにかく教師であれば誰であれ登場されては困るわけであり、（別の解釈を誘導する文脈がない限り）英語の“a”的な解釈となる。

(a) あ、先生が来た。

一方教室で開始チャイムがなっても雑談を続けているような場面であれば、通常特定の教員としての解釈となる（“the”、あるいは英語文化的には例えば“Mr. Smith”など特定名が使われる状況である）。

ちなみに英語学の授業等での議題としてこの解釈の多様性を考えるならば、例えば、ここでの {a/the} 的解釈が語用論的なものであるという立場が一つある。つまり、日本語の名詞句を定性に関して意味論的には無指定であり、このような解釈の違いは漠然性 (vagueness) に対する語用論の処理の問題であると考えるのである。しかしながら、例えば、「冠詞」を普遍的文法範疇であるとし、定性の指定が義務的素性であると考えるのであれば、定性について多義的な空の冠詞があるという議論もできよう。英文法での冠詞の理解の確認を日本語から検討する例として使えと共に、誘導次第では英語学的思考強化として、学生の思考素材、あるいは議論課題とできるであろう。

4：英語の仮定法に関連する議論として、日本語の条件文の構文は、反実である場面でも条件の場面でも、更には英語で“when”に対応するような場面でも状況次第では用いる。つまり、日本語の「たら」は一見英語の仮定法に対応するものとして指導されているが、実際にはもっと守備範囲が広い。例えば、(b) は (b-1) の用例では反実仮想的、(b-2) のそれでは通常の条件文的、(b-3) においては“when”の解釈となる。

(b) 夫が帰ってきたら…

(b-1) [夫が行方不明] 夫が帰ってきたら、
この子の成長をきっと喜ぶだろう。

(b-2) [夫は研究所に泊り込むことが多く、いつ帰宅するかわからない]
もし今晚夫が帰ってきたら、離婚の話を
するのはやめよう。帰ってこなかったら…。

(b-3) [毎日夕方には帰宅する夫を持つ妻が、
セールスマンの売り込みに対し]
夫が帰ってきたら相談します。

英文法から英語学へー1 導入編

これもやはり冠詞の議論と並行的に、それぞれの解釈は漠然とした (vague) 言語情報が語用論的に富化 (enrich) されたものであると考える方向と、意味論的に多義 (ambiguous) であり語用論はその多義の一義化 (disambiguation) を果たしているにすぎない、と考える方向とが考えられる。つまり、前者の場合、日本語の「たら」は “if+条件法/if+仮定法/when” に関して意味を限定できるほどの情報量がなく、英語との対応はあくまで文脈や知識等を基に詳細化されると考えることになる。一方後者の場合は、「たら」は “if+条件法/if+仮定法/when” の3つの意味を持ち、語用論的にそのいずれかに決定されているということになる。通常の文法学習においてはどちらの立場をとるか本質的な問題はないであろう。この場合は指導しやすいスタンスに立てばよいと考えられる。

5：日本語にはいわゆる時制の一致はない。故に（少なくとも学習直後の初期の段階においては）意識せずに従属節の時制を調整することは困難であると考えられる。慣れだけで習熟できるとは更に考えにくい。

もちろん、英語においても時制の一致の例外があり、規範文法で指定されているような例（真理等）以外に広範囲なものようであるが、だからといってこれを基準とすべきというのは乱暴であろう。少なくともこの路線では Cambridge 英検の Proficiency をパスすることも現地就職することも困難であろう。

6：学生を擁護し中立的な立場に立つのであれば、(4) の想起しやすさの変化を指摘しておくべきであろう。この図式は、かつては高校受験前後以降の生徒・学生なら皆知っているであろう図式であり、常識であった。そして、確かに、市販の中高生用参考書にはいまだ当然のように記されているものであるが、指導上はかつてほど重視した教育を行っていないよ

うである。つまり、生徒や学生がこの図式をそもそも重要ポイントとして指導されていないのであれば、身につけにくいのは当然であり、想起もできないであろう。

又、日本語においては主語が省略しやすいことから、受動態の主語も軽視し、結果として (4) における S' の元となる目的語に注意が向かないために判断ができない、あるいは誤るという学生が存在する可能性もあるが、その場合には「英語には主語が必要である」が (4) 以上に低い習熟度にとどまっていることになる。

一方で、英検2級前後以上の実力を持つ学生の中には、自動詞+前置詞を利用した受動態（例えば look + at）の例を想起して判断に悩む、あるいは判断時間が長くなる場合もあるようである。ちなみに、(1)～(3) の例では前置詞は関与していないので結局結論は変化しない。

7：英文法の議論以前に、日本語の問題もありえる。(1) と同種の (a) と、「られ」を用いているが別の意味である (b) とが区別できない学生も年々増えている印象を受けるのである。

- (a) 先生に来られた。
- (b) 先生が来られた。

つまり、学生によっては (a) を日本語における受動態の例として解釈できずに尊敬の解釈をしてしまったり、逆に (b) の優先的な解釈は受動態としての解釈であるとするのである。もちろん、(a) の非明示主語の想定次第では (a) を (a') とし、また、対比の「が」とするなら (b) を (b') とし解釈することも可能である。これらの解釈は多少不自然ではあるが、「…てしまった」がないことからくる不自然さを考慮すると容認可能な解釈可能性と言えなくもないであろう。

山 崎 英 一

(a') (非常に高貴な人が) 先生 (のところ) に来られた。

(b') (来られてしまって困ったのは太郎君ではない。) 先生が来られた (のである)。

しかしながら、(a) を (2) や (3) の例と並べて提示した場合や、受動態 (「いわゆる受身」) の解釈としての (a) であると念のために告知した場合にも区別ができない学生がいるのである。反射的には、これは昨今の学生が敬語を知らないことを示している、と捉えたいが、必ずしもそうではないかもしれない。つまり、学生の敬意表現の体系自体が変化している可能性もある。つまり、例えば、日頃「られ」等の敬語体系を利用せずに敬意を表現している故に「られ」による解釈が困難になっているという可能性である。例えば関西出身の学生であれば通常ハル敬語を用い、それ故 (b) ではなく (c) に対する語感判断しかできない可能性がある。

(c) 先生が来はった。

あるいは従来の敬語体系以外の、例えばイントネーションで敬意を表す等別の言語手段をもちいたりするのかもしれない。教師があまりに敬意の対象でなくなっているために判断に苦しむのかもしれない。更には又、英語でのように、聞き手との上下関係や発話状況にさほど関わらない、統一的言語使用の方向にあるのかもしれない。男性語・女性語の区別がますます希薄になってきていると思われる現状からも、今後の調査・考察が求められるであろう。

8 : これはあくまで「この公式が受動変形の唯一正当な形式とした場合である」という注意書きがつく。つまり、体系が正しければそれだけ正当な予測がなりたつが、体系に不備があれば当然その分予測性及び信頼性は低下する。そこで、より厳密に言い直す

ならば、「この公式が正しい程度に応じて、(1) ~ (3) のような自動詞からの受動態に関する判断ができる」ということになる。

実際、この公式には上記注での自動詞+前置詞の場合が考慮されていないという「英文法」レベルの問題もある。更に、(4) の公式には英語学的に正当性の問題がある。つまり、いわゆる受動変形はあくまで便法であり、能動態と受動態は一方から他方に変換する関係にあるわけではない、とするのが学問における基本的な説である。これは、例えば能動態のない受動態文の存在すること、つまり反例があること、この公式を素直に額面通りとすると、認知科学というメンタル語 (mentalese : いわゆる心的言語)、あるいは統語論でいう基底文、が特定言語 (英語) の能動態であるという極論になってしまうこと、等によって示すことができる。が、このような議論は、あくまで「英文法」ではなく「英語学」で扱うべき抽象的次元のテーマであり、英語学からどのような知見でも英文法に導入するという姿勢はかえって学習や習熟を阻害すると考えられる。なお、このことは、逆に言うと、「英語学」の指導の段階では、発展的議論の争点を認識し発展させるためには、(4) のような基本的な英文法の習熟が前提として必要であると言えるであろう。

9 : 前節での、慣れを重視しすぎる教育と英文法の関係に似たとえで表すならば、次のように言えるであろう。日本語を円形にたとえ、英語を多角形に例えらとする。我々日本語母語者は第一言語習得として日本語を学ぶことで、円を描く能力は高い。が、慣れの教育は、例えば多角形をたくさん見させるだけで定規抜きに多角形を描かせるようなものである。定規としての英文法とその使い方に親しめば親しむほど、提示された多角形を再描写しやすくなるのである。

10: なお、EGiU は147課と補講7、発展問題部から成り立っており、追加発展問題を含む CD-ROM も添付されている版や解答を含む版等あり、同じ「第3版」を名乗っていてもいくつかのバリエーションがある。また、本文にあたる147課は更に大きく16のテーマでくくられている。1課あたりは左に解説、右に練習問題という形をとっている。このことから、本書は、練習という形での経験の蓄積も重視していることが言え、知識だけの学習にしないという目的にも適している。16のテーマを順に列挙すると、まず前半が動詞あるいは節を中心とした大きな観点の文法項目で、時制・相関連が3（「現在と過去」「現在完了と過去」「未来」）、「法助動詞」「if と wish」「受動態」「間接話法」「疑問文と助動詞」「ing と不定詞」となる。後半は名詞等句レベルに始まり前置詞や接続詞、熟語等比較的細部あるいは表現に目を向けた項目が続く。具体的には、「冠詞と名詞」「代名詞と限定詞」「関係代名詞」「形容詞と副詞」「接続詞と前置詞」、独立的に「前置詞」「句動詞」となっている。

なお、日本語母語者にとっての本書の問題点としては、本文言及分以外に、英語圏での発刊物のため、日本人というよりは非英語母語者を念頭に書かれている点、日本での英語教育での文法体系とは必ずしも一致しない点、本文だけで300ページ近くもあり大学生といえどもその量に抵抗を感じる点、等々である。又、高校までで一通りの英文法を学んでいる学生前提であることから言わずもがなではあるが、筆者（Raymond Murphy）が述べるように、この本は学習順に提示された教科書というよりは、中級学習者向けの参考書兼練習問題集であるため、英文法を知っているが使えない学生や、勘違いしている個所が多い学生にはよいが、実質的に英文法をまるで知らない者には使えない。

このように列挙すると欠点もあるが、日本語で書かれた英文法の参考書も参照しての自習やグループ学習で理解を高めておくことを履修の前提とするこ

とで、ある程度不備を補うことが可能である。

11: 日本語と英語でどのような場合にどのように拡張できるのかは、各言語の文化、あるいは思考の傾向の違いもあり、当然異なりうる。ただしテーマ自体が非常に高度故、言語面に加え文化も扱いうる理論が必要となってくる。当然「英文法」で扱う次元の問題ではない。

基本参考文献

荒木一雄（編）1999. 『英語学用語辞典』三省堂.

Azar, B.S. 1998. *Understanding and Using English Grammar* (3rd ed.). Pearson ESL

Azar, B.S. 2002. *Fundamentals of English Grammar* (3rd ed.). Pearson Education

Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell. (武内・山崎（訳）『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房.)

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Chomsky, N. 1986. *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Cole, P. (ed.) 1978. *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*. New York: Academic Press.

Cole, P. & J. L. Morgan (eds.) 1975. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press.

Fauconnier, G. 1985. *Mental Spaces*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

- Fodor, J. A. 1980. *The Modularity of Mind*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Gazdar, G. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition and Logical form*. New York: Academic Press.
- Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation" in Cole & Morgan (eds.) (1975), 41-58.
- Grice, H. P. 1978. "Further Notes on Logic and Conversation" in Cole (ed.) (1978), 113-28.
- Hornstein, N. 1984. *Logic as Grammar*. Cambridge, Mass. MIT Press.
- Huddleston, R & G. K. Pullum 2005. *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge University Press.
- Jackendoff, R. 1987. *Consciousness and the Computational Mind*. Cambridge, Mass. MIT Press.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Lightfoot, D. 1979. *Principles of Diachronic Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J. 1977. *Semantics, Vols. 1 & 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCawley, J. D. 1981. *Everything that Linguists Have Always Wanted to Know about Logic* But Were Ashamed to Ask*. Chicago: University of Chicago Press.
- May, R. 1985. *Logical Form*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Palmer, F. R. 1986. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Radford, A. 1988. *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Recanati, F. 2004. *Literal Meaning*. Cambridge University Press.
- Sperber, D. & D. Wilson 1986. *Relevance*. Oxford: Blackwell. (内田ら (訳)『関連性理論：伝達と認知』研究社出版.)
- Van Riemsdijk, H. & E. Williams 1986. *Introduction to the Theory of Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.